コラージュ制作者の性格特性と作品特性¹

宮城教育大学 佐藤静²

Collage work characteristics and personality

Shizuka Sato (Miyagi University of Education, Aoba-ku, Sendai 980-0845)

The purpose of this study was to investigate the relationship between personality and characteristics in collage work. Seventy undergraduates filled the Yatabe-Guilford (YG) personality test and produced a piece of collage work. The YG personality types were not different in terms of collage work characteristics. However, emotional adaptation and introvert/extrovert scores were reflected in the number of cuttings used in the piece. General activity score was reflected in the number of vehicle pictures used. Those who used an eye picture had a tendency to be depressed and lacking in confidence. Those who used a "stone circle" picture tended to be more emotionally adapted and extroverted. The results suggested a possibility that personality traits were reflected in specific characteristics in collage work.

Key words: collage work, personality, picture, work characteristics, Yatabe-Guilford personality test.

臨床心理学における芸術療法の基礎研究では、絵画や箱庭などの各種の造形表現の内容的特性と作品制作者のパーソナリティや精神障害等の心理特性との関連性が検討されてきた。すなわち、個人の心理特性は作品特性に反映されるのか、反映されるとすればどのようなように反映されるのか、という最も基本的な問題である。本研究では、コラージュ療法 (Buck & Provan-cher, 1972) におけるコラージュ表現をとりあげて、コラージュ作品に制作者の性格特性が反映されるのかどうか、反映されるとすればどのような特徴がみられるのかについて探索的な検討を行う。コラージュとは雑誌などから切り抜いた写真や絵を画用紙に貼り付けることによって、絵画的な作品を制作する美術表現技法の一種である。

先行研究として、心理診断 (査定) の観点から行われた Lerner & Ross (1977) の精神病患者群と健常者群のコラージュ表現の比較研究が挙げられる。被験者は作品制作のための共通材料として5種類/5冊の市販雑誌を与えられて、自由にコラージュ作品を制作した。その結果、健常者群に比較して精神病患者群では切

り抜きの数や使用された“人間”素材が少ないなどの特徴を見いだした。その後、Lerner (1979) は精神病患者群と健常者群の作品の違いを厳密に判別することは困難であり、コラージュ作品特性と個人特性との関連性についてはより詳細な検討が必要であると結論づけている。しかし、それ以降の研究においてもコラージュ作品特性と個人特性との間に一定の対応関係を見いだすことが困難であり、目立った成果が得られていないのが現状である。

その理由として、ほかの芸術表現と同様、創作行為 (creation) であるコラージュ制作は目標が不明確な悪定義問題であり、それを実験的に統制して取り扱うことが難しかったことが考えられる。すなわち、Lerner らのように実際の臨床場面と同様の多量の図版を含む市販雑誌を制作用素材として用いると、作品制作の自由度が高くなり、作品内容の変動の幅が大きくなりすぎて分析の網の目にかかりにくくなる。逆に制作素材の量を制限すれば創作の自由度が限定され、芸術療法としての生態学的妥当性を失ってしまうおそれがある。こうした困難は芸術療法研究全般に共通する問題である。

そこで、本研究では自由な創作課題としての性質を失わない程度にコラージュ制作用素材の量を制限しようと考えた。また、心理特性の分析には性格類型に加えて下位の因子特性の分析が可能な矢田部-ギルフォ

¹ 本研究の一部は平成12年度の日本文学心理学会第1回大会で発表した。

² 実験実施に際してご協力いただいた東北学院大学の大山正博教授に感謝いたします。

Table 1
コラージュ制作用素材図版集 1 冊に含まれる
カテゴリ別図版の個数とその割合

図版のカテゴリ	個数 (%)
人 物 (W: 全体像)	23 (12.4)
人 物 (P: 部分像)	16 (8.6)
動 物	14 (7.6)
植 物	12 (6.5)
建 物	7 (3.8)
乗 物	8 (4.3)
物 (Object)	105 (56.8)
合 計	185 (100.0)

注) 物 (Object) には道具, 家具, アクセサリーなどが含まれる。

ード性格検査 (以下 YG 検査と記す) を用いて, 作品・制作特性の性格類型による群間比較とともに, YG 尺度得点と作品・制作特性指標との相関分析を試みる。さらに, 特徴的な素材図版をとりあげて, それらの使用者群と未使用者群の YG 尺度得点の比較を試みる。

方 法

被験者 大学生 70 人 (男性 34 人, 女性 36 人)。平均年齢は 19.0 歳であった。

コラージュ制作用素材 作品制作用の共通素材として B4 サイズ (25.5×36.0 cm) のモノクロ素材図版シート 10 枚 (10 ページ) 1 組 (白紙の表紙付, ホチキスどめ) を作成した³。これは一般的なマガジン・ピクチャー・コラージュ法で用いられる雑誌素材を簡略化した体裁となっている。掲載した図版類はカタログや画集などから採集した人間や動物, 植物, 乗物や物体, 建造物等のペン画であり, それらを図版シートごとに構成して白色普通紙にコピー印刷した。素材図版シートのページの綴じ順はページ数 (1-10) と図版シート 10 種の 10×10 の組合せによるラテン方格 7 組に従った 70 通り (70 冊) であった。素材図版シート 1 冊に含まれる図版総数は 185 個であり, 内容カテゴリ別内訳数は Table 1 のとおりであった。その中で物体 (object) カテゴリの割合が多いが, これは人物・動物・植物・建造物・乗物以外のカテゴリの図版をすべて含めたためである。

手続き 実験は 2 回に分けて, いずれも大学の大教室における集団場面で行った。最初の回では YG 検査を実施し, 1 週間後にコラージュ作品を制作してもらった。作品制作にあたっては素材図版シート 1 冊, B4 サイズの白色画用紙 1 枚を渡して「素材図版シートを自由に切り貼りして画用紙の上に何か絵をつくってください。内容は自由です」と教示した。ハサミと糊は各自に持参してもらった。制作時間は 80 分の範囲内で自由とし, 画用紙の裏に制作開始時刻と終了時刻を記入するよう指示した。各被験者の席は隣と 1-2 人離れて坐るよう調整し, 他者の作業や作品を見ないで自分の作品制作に集中するよう指示した。

分析方法 作品・制作特性の指標として, 作品画面に貼り付けられた切り抜き素材の数 (切片数), 作品に使用した素材図版シート数 (使用シート数), 制作時間 (分), および作品に使用されたカテゴリ別素材図版数をとりあげた。人間と動物カテゴリに含まれる素材図版は身体全体 (W) を使用した場合と部分 (P) を使用した場合 (身体全体からの部分的な切り取り使用を含む), およびそれらの合計 (W+P) を集計した。素材図版のなかには, カップや皿から構成

された「食器セット」のように, 複数の小要素からなるものも含まれる。それらの小要素が切り分けられて個々独立に使用される場合があったため, 集計では個々の小要素ごとにカウントした。以上の各指標値について YG 性格類型ごとの群差と, 各 YG 尺度得点との相関を分析した。

さらに, 素材図版のなかに含まれる「目」, 「武器」, 「恐竜」, 「魔女」, 「ストーン・サークル」図版の使用者群と未使用者群の各 YG 尺度得点を比較した。「武器」にはナイフや銃のほかにはバターナイフなどを刀に見立てて使用した場合も含めた。「目」, 「武器」, 「恐竜」はともに威嚇的な強い印象を受ける図版である。箒に乗って空を飛んでいる「魔女」は童話的でユーモラスな印象を受ける図版である。古代遺跡の「ストーン・サークル」は神聖な円形の結界をイメージさせる図版である。これらの図版はいずれも使用者数が極端に偏らない範囲内 (全被験者 70 人中 11-28 人以内) にあり, 作品中で目を引く特徴的な図版であるという理由によりとりあげた。

結 果

YG 性格類型による比較 作品・制作特性指標値の A-E 類型ごとの群差について Kruskal-Wallis 検定を行った結果, いずれの指標値についても有意差は認められなかった (統計値は省略)。

YG 尺度得点と指標値との相関 YG 尺度得点と作品・制作特性指標値との Spearman 相関係数は Table 2 のとおりであった。I (劣等感) 尺度得点と切片数の間に有意な負の相関が認められた。D (抑うつ) 尺度得点と切片数・使用シート数, I 尺度得点と使用シート数・制作時間および人間 (W+P)・動物 (P)・物体の各図版の出現数, O (主観) 尺度得点と制作時間, Co (協調) 尺度得点と切片数のそれぞれには有

³ 佐藤 (1998) の実験で使用したものと同一。

Table 2
YG 尺度得点と制作特性値および素材アイテム出現数間の Spearman 相関係数

作品/制作 特性指標	YG 尺度											
	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
切片数	-.281*	.028	-.514***	-.146	-.213+	-.243*	.083	.301*	.241*	-.127	.264*	.260*
使用シート数	-.257*	-.025	-.266*	-.080	-.086	-.047	.016	.052	-.021	-.044	-.021	.025
制作時間	-.174	-.141	-.243*	-.137	-.306*	-.201+	-.041	.037	-.060	-.031	.074	.078
人間 (W+P)	.063	.105	-.259*	.002	.127	-.062	.096	.190	.091	.021	.075	.134
人間 (W)	.008	.082	-.085	-.028	.008	-.080	-.029	.081	.121	.163	.034	.132
人間 (P)	.037	.091	-.209+	.012	.149	-.009	.098	.079	-.066	-.094	.050	.001
動物 (W+P)	-.056	.060	-.123	-.087	-.140	-.197	.013	.114	.185	.050	.109	.060
動物 (W)	-.094	.053	-.045	-.071	-.162	-.215+	-.050	.049	.176	.089	.097	.054
動物 (P)	.106	.039	-.264*	-.044	.069	.013	.203+	.129	.018	-.058	.045	.012
植物	-.039	.000	.019	.005	-.118	.036	.007	-.020	.046	.015	.262*	-.004
建造物	-.064	-.113	-.198	-.192	-.054	-.235+	-.040	.097	-.004	-.029	.126	-.025
乗物	-.114	-.001	-.032	-.043	-.038	-.155	-.096	.299*	.167	.201	.115	.165
物体	-.183	-.023	-.381**	-.032	-.149	-.136	.144	.036	.095	.083	-.006	.153

+ $p < .1$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

意な負の相関が認められた。G (活動) 尺度得点と切片数・乗物図版の出現数, R (気軽) 尺度得点と切片数, A (支配) 尺度得点と切片数・植物図版の出現数, S (社会的向性) 尺度得点と切片数のそれぞれには有意な正の相関が認められた。そのほか, I 尺度得点と人間 (P) 図版の出現数, O 尺度得点と切片数, Co 尺度得点と制作時間および動物 (W)・建造物の各図版の出現数のそれぞれに有意傾向のある負の相関が認められた。Ag (攻撃) 尺度得点と動物 (P) 図版の出現数には有意傾向のある正の相関が認められた。

使用図版ごとの分析 “目”, “武器”, “恐竜”, “魔女”, “ストーン・サークル” 図版の使用者群と未使用者群の各 YG 尺度得点の中央値と群差の検定結果は以下のとおりであった (有意な群差が認められた尺度についてのみ報告する)。

“目” 図版では, D 尺度得点の中央値は使用者群が 15.00, 未使用者群が 12.00 で, その差は有意であった (Mann-Whitney U 検定による, 以下同様: $U = 353.0$, $W = 1578.0$, $Z = -2.075$, $p < .04$)。O 尺度得点の中央値は使用者群が 10.00, 未使用者群が 12.00 で, その差には有意な傾向が認められた ($U = 386.0$, $W = 1611.0$, $Z = -1.652$, $p < .1$)。

“武器” 図版では, I 尺度得点の中央値は使用者群が 7.50, 未使用者群が 11.00 であり, その差は有意であった ($U = 400.0$, $W = 806.0$, $Z = -2.259$, $p < .03$)。

“魔女” 図版では, G・R・T 尺度得点の中央値は使用者群がそれぞれ 13.00, 15.00, 10.00 で, 未使用者

群がそれぞれ 9.00, 11.00, 6.00 であり, とともに使用者群の値が高く, それらの差はすべて有意であった (それぞれ $U = 334.5$, $W = 1660.5$, $Z = -1.987$, $p < .05$; $U = 279.5$, $W = 1605.5$, $Z = -2.716$, $p < .01$; $U = 328.5$, $W = 1654.5$, $Z = -2.068$, $p < .04$)。

“ストーン・サークル” 図版では, D・C・N・O・Co 尺度得点の中央値は使用者群がそれぞれ 9.00, 9.00, 7.00, 8.00, 6.00 で, 非使用者群がそれぞれ 14.00, 12.00, 12.00, 12.00, 9.00 であり, とともに非使用者群の値が高く, それらの差はすべて有意であった (それぞれ $U = 199.5$, $W = 265.5$, $Z = -2.022$, $p < .05$; $U = 171.5$, $W = 237.5$, $Z = -2.478$, $p < .02$; $U = 111.0$, $W = 177.0$, $Z = -3.459$, $p < .001$; $U = 201.0$, $W = 267.0$, $Z = -1.999$, $p < .05$; $U = 173.5$, $W = 239.5$, $Z = -2.446$, $p < .02$)。また, I 尺度得点の中央値は使用者群が 7.00, 未使用者群が 11.00 で, その差には有意な傾向が認められた ($U = 203.5$, $W = 269.5$, $Z = -1.957$, $p < .06$)。G・T 尺度得点の中央値は使用者群がそれぞれ 15.00, 9.00 で, 未使用者群がそれぞれ 10.00, 6.00 であり, とともに使用者群の値が高く, それらの差は有意であった (それぞれ $U = 181.5$, $W = 1951.5$, $Z = -2.315$, $p < .03$; $U = 192.5$, $W = 1962.5$, $Z = -2.138$, $p < .04$)。また, A 尺度得点の中央値は使用者群が 13.00, 未使用者群が 10.00 で, その差には有意な傾向が認められた ($U = 214.5$, $W = 1984.5$, $Z = -1.779$, $p < .08$)。

“恐竜” 図版ではどの YG 尺度得点にも有意な群間差は認められなかった。

考 察

性格類型と作品・制作特性 今回とりあげたコラージュ作品・制作特性にはYG性格類型の違いによる有意な差異は見いだせなかった。これは性格類型という区分が大局的すぎて、それらの違いが作品・制作特性指標の群差に反映されなかったためと考えられる。コラージュ作品特性と性格特性との関連性を明らかにするにはより下位の性格因子による詳細な分析が必要と考えられた。

性格因子と作品・制作特性 情緒不安定性因子(D, I)や社会不適応性因子(O, Co)の得点が高いほど切片数が少ない傾向が認められた。逆に、衝動性因子(G, R)や主導性因子(A, S)の得点が高いほど切片数が多い傾向が認められた。すなわち、YGプロフィールの上段の情緒的適応が良好であるほど、またYGプロフィールの下段の内向-外向特性が外向的であるほど切片数が多いことがわかった。よって、切片数は作品制作者の情緒的適応状態と内向-外向特性を反映する指標とみなすことができる。

切片数は作品制作の活動量を直接的に示す行動上の指標である。切片数に性格特性が反映される理由としては、情緒的安定と外向傾向がともに制作活動への動機水準を高め、表現活動を活性化・促進するためであると推測される。杉浦(1994)の研究では年齢の増加にともなって切片数が増え、高齢者では減少するという変化特性が明らかになっている。このことから、切片数は作品制作者の内的・外的な心身の活動性をともに反映する指標と考えられる。

I尺度得点が高いほど使用シート数や制作時間が少ない傾向が認められた。同様に、D尺度得点が高いほど使用シート数が少ない傾向が認められた。I尺度得点やD尺度得点が高いほど切片数が少ないことを勘案すると、自信のなさや抑うつ傾向が作品制作(表現)への動機づけを抑制するためと考えられる。社会不適応性因子(O, Co)の得点が高いほど制作時間が少なくなる傾向も認められたが、これも作品制作課題への動機づけの抑制を反映しているためと考えられる。

I尺度得点と人間(W+P)と物体の各素材の使用数にも負の相関が認められた。この理由としては、両素材は作品制作に使用される割合が多く、I尺度得点と切片数との相関の影響を受けたためと推測される。

G尺度得点が高いほど乗物図版が多く使われる傾向が認められた。コラージュと制作手続きが共通している箱庭では、乗物玩具は川(水)の流れなどとともに“心的エネルギー”の動きを表す象徴的素材と解釈されることがある(河合, 1969; 岡田, 1984)。一般的活動性を示すG尺度はそうした心的活動傾向に関連すると思われるから、今回の研究結果は箱庭療法で

指摘されてきた事柄と整合性をもつと考えられる。

素材図版の使用と性格特性 “目”図版の使用者群は未使用者群よりも抑うつ傾向が高いことがわかった。これは抑うつ傾向の度合いが“眼差し”の刺激に対する反応傾向の差異に反映されたためと推測される。

“武器”図版の使用者群は未使用者群よりも劣等感が低い傾向をもつことがわかった。これは自信の度合いが攻撃の意味をもつ刺激に対する反応傾向の差異に反映されたためと推測される。また、両群のAg尺度得点には有意差がなかった。このことは、“武器”図版(の選択/使用)による表現意図(欲求)と制作者の攻撃性傾向が単純には一致しないためではないかと推測される。

“魔女”図版の使用者群は未使用者群よりもG・R・T尺度得点が高いために高い傾向が認められた。これらの尺度は衝動性・非内省性因子群であり、そうした性格傾向の度合いが童話的なファンタスティックで浮遊的動感のある刺激に対する反応傾向の差異に反映されたためと推測される。

“ストーン・サークル”図版の使用者群は未使用者群よりもYGプロフィールの上段(D・C・I・N・O・Co)の情緒的適応が良好で、下段(G・T・A)の内向-外向特性が外向的傾向をもつことがわかった。よって、“ストーン・サークル”図版の選択は情緒的適応の安定傾向と外向的傾向を反映する指標とみなすことができよう。この図版は円形状の構造を表すものであり、曼陀羅(Mandala; Jung, 1969)に通じる象徴的性質をもつと思われる。曼陀羅図形は“自己(Self)”や“全体性(totality)”の象徴として箱庭療法で重視され、心的統合過程に関連するといわれている。“ストーン・サークル”図版の使用者群にみられる情緒的安定傾向と外向的傾向は、そうした箱庭療法における知見と関連性をもつと考えられる。

“恐竜”図版についてはどのYG尺度得点においても使用者群と未使用者群間の有意差が認められなかった。このことから、性格特性の差異を反映する図版と反映しない図版があることがわかった。

特定の素材図版の使用/選択に一定の性格特性が反映される理由は次のように推測される。個々の素材図版は作品制作者に連想や情動反応を生起させる特有の複合的な刺激属性(情報)をもつと考えられる。しかし、ある図版のもつ刺激属性は、ある制作者の連想や情動を活性化させるが、別の制作者にとっては影響を与えないというように、素材図版に対する注意の度合いや連想内容、情動反応には個人差がある。そのことが図版の選択/使用の決定(意思決定)の差異に反映されると考えられる。このとき、本研究から、ある一定の性格特性をもつ作品制作者に共通の選択/使用行動を生起させる刺激属性をもつ図版と、そうでない図

版があることがわかった。本研究でとりあげた“目”、“武器”、“魔女”、“ストーン・サークル”の図版が前者の例であり、“恐竜”図版が後者の例である。ただし、そうした反応を引き起こす刺激属性が何であるかはまだ不明である。

また、素材図版に対する連想や情動反応の大部分が意識的過程ではなく、自動的/無意識的な過程であると推測される。しかし、最終的に素材図版を選択/使用するかどうかの意思決定は意識的なプランニング過程（佐藤，1998，2001）で行われると考えられる。すなわち、図版刺激に対する反応過程と図版の使用/不使用は直結していないと考える必要があるが、今回の研究からその間の心的過程を明らかにすることはできない。従来論じられてきた“象徴的表現”のメカニズムを説明するためには、そうした心的過程を解明していく必要がある。本論文では、コラージュ制作において特定の性格特性をもつ者に共通の図版選択/使用行動が生じうる可能性を指摘するにとどめ、今後の研究課題としたい。

研究成果と問題点 今回はコラージュ表現がなんらかの性格特性を反映するかどうかについて探索的に検討するために YG 検査を手がかりとした。その結果、作品制作者の性格特性とコラージュ作品特性との関連性を示唆する結果が得られた。今後はより詳細にコラージュ表現と関連性をもつ性格特性を探る必要がある。近年の性格に関する特性論研究領域では 5 因子モデルが定説となりつつあるが、“Big Five”のなかの調和性・誠実性・開放性（遊戯性）の各因子は YG 検査では測定が困難な部分である。今後は、こうしたより広い視点からコラージュ表現との関連性を分析していくことが必要である。

本研究の結果は今回使用した素材図版に規定されたものであり、相関も強いものばかりではなかったから、ほかの素材図版を使用して追調査を行うことが必要である。また、コラージュ作品の内容的特徴は素材図版の選択（使用）傾向だけに還元されない、より多様な要素を含んでいると考えられる。今後、コラージュ作品の内容特性を多角的に分析するための工夫が必要である。

本研究では I 尺度得点と動物（P）図版の出現数、および A 尺度得点と植物図版の出現数の間にも相関傾向が認められたが、その理由を説明することは困難である。同様に、I 尺度得点と人間（P）図版の出現数、Co 尺度得点と動物（W）・建造物の各図版の出

現数、Ag 尺度得点と動物（P）図版の出現数のそれぞれに認められた有意傾向をもつ相関傾向についてもその理由を説明することは困難である。こうした問題点は本研究のような相関研究（correlation study; McLaughlin & Carolan, 1992）の限界によるものである。今後はコラージュ作品を産出する制作行動と心的過程を直接的に明らかにしていく方法論的工夫が必要と考える。

引用文献

- Buck, R. E., & Provancher, M. A. 1972 Magazine picture collage as an evaluative technique. *American Journal of Occupational Therapy*, **26**, 36-39.
- Jung, C. G. 1969 *The archetypes and the collective unconscious*. Princeton, NJ: Princeton University Press. Pp. 355-390.
- 河合隼雄 1969 箱庭療法入門 誠信書房 Pp. 31-51.
- Lerner, C. 1979 The magazine picture collage: Its clinical use and validity as an assessment device. *American Journal of Occupational Therapy*, **33**, 500-504.
- Lerner, C., & Ross, G. 1977 The magazine picture collage: Development of an objective scoring system. *American Journal of Occupational Therapy*, **31**, 156-161.
- McLaughlin, Sr. D., & Carolan, R. 1992 Types of research. In H. Wadeson (Ed.) *A guide to conducting art therapy research*. Mundelein, IL: American Art Therapy Association. Pp. 49-54.
- 岡田康伸 1984 箱庭療法の基礎 誠信書房 Pp. 159-173.
- (Okada, Y.)
- 佐藤 静 1998 コラージュ療法の基礎的研究——コラージュ制作過程の分析—— 心理学研究, **69**, 287-294.
- (Sato, S. 1998 Collage therapy and an analysis of production process in collage work. *Japanese Journal of Psychology*, **69**, 287-294.)
- 佐藤 静 2001 コラージュ制作過程の研究 風間書房
- (Sato, S. 2001 *On collage production process*. Kazama Shobo.)
- 杉浦京子 1994 コラージュ療法 川島書店
- (Sugiura, K.)

——2001. 6. 5 受稿, 2001. 9. 29 受理——